

遺跡に学ぶ

No. 43



榛名山

なぜ?

どうして?

▼金井下新田遺跡

▼金井東裏遺跡

金井遺跡群 授業に使える古墳時代の“なぜ?”
金井東裏遺跡
金井下新田遺跡



1 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ってどんなところ？

群馬県渋川市北橘町の瓜山の上に位置する公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は、公共開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査と研究を通して、埋蔵文化財の大切さを広め、次の世代に伝えていくための組織です。主な仕事に

- ①遺跡の発掘調査
- ②遺跡・遺物の整理と研究
- ③埋蔵文化財の保存と普及

があります。

遺跡（昔の人の生活の痕跡）の発掘調査は、県内の様々な場所で行っています。もしかしたら、皆さんの学校の近くにも、私たちが発掘調査した遺跡があるかもしれませんね。

遺跡から出土した遺物（土器や石器など、昔の人が使っていた道具）は、整理・研究をし、『発掘調査報告書』にまとめられます。こうしてまとめられた成果をもとに、さらに研究が進められ、昔の人たちの生活や社会が紐解かれていくのです。

研究でわかったことは、発掘情報館での展示や講



上空から見た事業団本部（群馬県埋蔵文化財調査センター）

演会、当事業団ホームページなど、様々な方法で県内外の方々に紹介しています。また、遺物がより良い状態で次の世代に残せるように、必要な保存処理も行っています。



発掘調査のようす



整理作業のようす



保存処理のようす（遺物の劣化を防ぐための作業）



普及活動のようす（土器・埴輪・勾玉づくり体験）

学校教育との歩み

これまで、私たちは埋蔵文化財の教育活用にも力を入れてきました。それでは、学校教育にどのような関わってきたのかを見てみましょう。

昭和 53 年 (1978)…設立初年。一般向けの現地説明会を随時実施。

昭和 58 年 (1983)…図書室・展示普及室を開設。

昭和 59 年 (1984)…普及資料課を設置・資料貸出の開始。社会科見学の一環としての団体見学、小・中学校及び高等学校からの資料借用依頼が増えていく。

昭和 63 年 (1988)…教育教材資料として、本誌の前身である『埋文だより』の刊行を開始。

平成 2 年 (1990)…社会科見学だけでなく、体験学習にも力を入れる学校教育の広がりと共に、土器づくりなどの講師派遣の要望が学校から出始める。前橋市・藤岡市・伊勢崎市・玉村町・高崎市・吉井町…と県内各地の学校から依頼が増えていく。

平成 5 年 (1993)…中部教育事務所の新任者研修の場として活用され始める。

『埋文だより』の主旨はそのままに『遺跡に学ぶ』の刊行を開始。

平成 8 年 (1996)…発掘情報館オープン。学校見学の受け入れや、体験学習の充実を図り、毎年多くの来館者を迎える。

平成 17 年 (2005)…収蔵展示室オープン。

平成 20 年 (2008)…群馬県教育センターでの展示をさらに充実させる。

事業団では、社会の変化や学校のニーズにできる限り応えられるように、様々なイベントを企画してきました。地域学習で利用しやすいように、より分かりやすく、手に取りやすい資料の提供を心掛けています。みなさんが住む地域でどのような歴史が紡がれてきたのか。目で見て、触って、実際に体感していただくことで、地域の歴史がより身近なものになることでしょう。



公開普及デーのようす (2年に一度開催されるイベント)



収蔵展示室のようす (旧石器時代から江戸時代までの遺物が展示されている)



夏休み親子宿題教室での土器づくりのようす

発掘情報館ってどんなところ？

発掘情報館は、埋蔵文化財について多くの方々に興味を持っていただくための施設です。展示室や体験学習室、図書室などをそなえています。

●3階【体験学習室】…縄文土器・埴輪・勾玉づくりなどの古代体験ができます。展示室で興味を持った土器などがあったら、ぜひここで製作体験してみましょう。

【遺跡情報室】…子ども向けの歴史本がたくさんあります。

●2階【資料展示室】…埋蔵文化財の研究成果をわかりやすく展示しています。最新情報展エリアがあり、年に数回、話題のテーマで展示をしています。

【収蔵展示室】…旧石器時代～江戸時代の遺物を約4,000点展示しています。資料展示室との違いは、なんと言っても時代ごとに展示していること。地域



発掘情報館

ごとに資料がまとまっているエリアもあり、身近な遺跡の遺物が見つかるかもしれません。

●1階【図書室】…全国の遺跡調査報告書をはじめ、多くの専門書をどなたでも自由に閲覧できます。



3階 体験学習室



3階 遺跡情報室



2階 資料展示室



1階 図書室

そのほか、講演会などのイベントも開催しています。イベント情報や発掘情報館の利用について、事業団ホームページをご覧ください。また、事業団の研究員が、学校に土器づくりや勾玉づくりの講師として出張する「出前授業」や、実物資料・複製品の貸出も行っています（※詳しくは『遺跡に学ぶ』第41号をご覧ください）。

2 金井遺跡群から学ぶ 授業に使える “なぜ？”

かないいせきぐん

金井遺跡群ってどんな遺跡？

古墳時代のムラが、榛名山の火山灰でパッキングされていたことから、重要な発見が相次ぎ、いま注目を集めている遺跡です。

担当 板垣詩乃

金井遺跡群は、榛名山北東麓の渋川市金井に位置する「かないひがしうら金井東裏遺跡」と「かないしもしんでん金井下新田遺跡」の総称です。「上信自動車道」の建設に伴い発掘調査されました。これまでに縄文～平安時代までの遺構や遺物が確認されていますが、なかでも古墳時代に注目

が集まっています。

なぜでしょうか？

それは、古墳時代の火山災害で、そこに生きていた人々やムラが火山灰にパッキングされ、当時の暮らしを知るための手がかりが数多く残っていたからです。

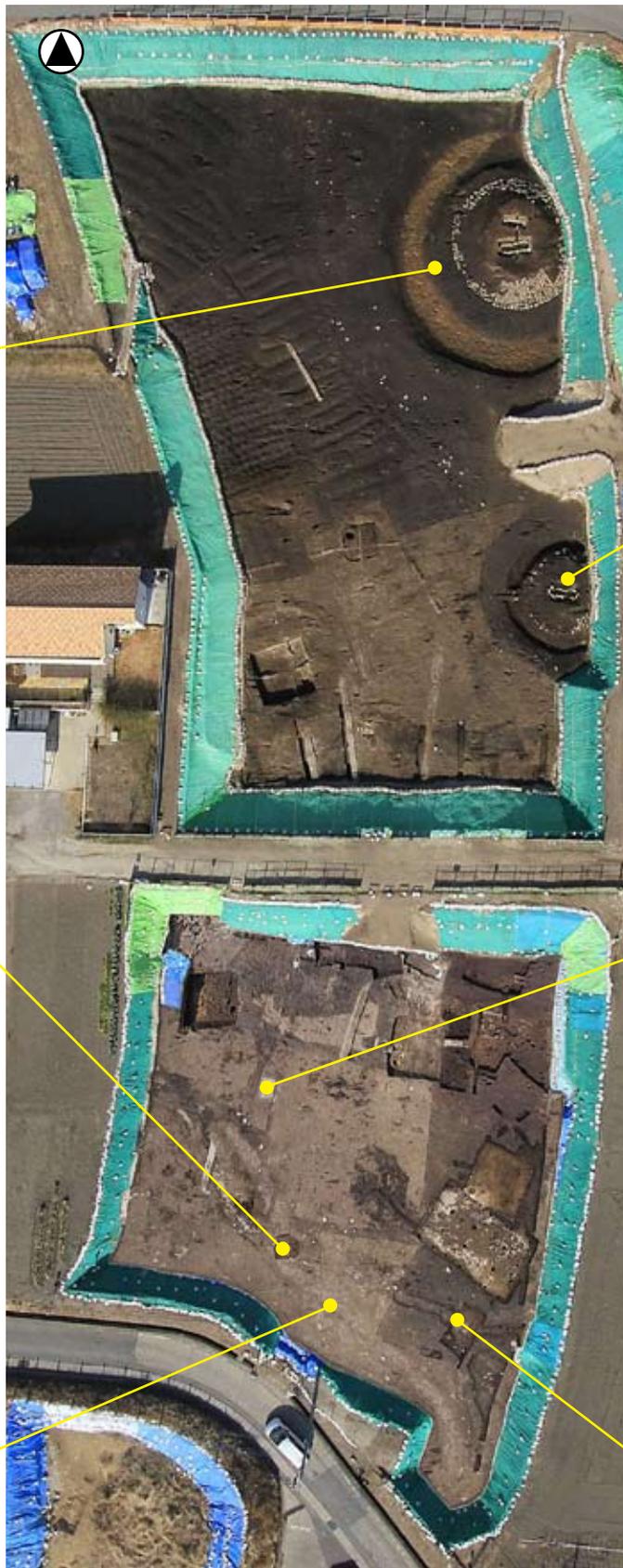


金井遺跡群のあるところ（東側上空から望む）

金井東裏遺跡を空から見てみましょう

金井東裏遺跡では、4人の古墳人のほか、人の足跡や古墳などが発見されました。これから各ページで紹介する「様々な発見」の位置関係を見てみましょう。

【金井東裏遺跡上空写真】



1号墳

直径17.4mの円墳です。石室からは、渡来人に関わる遺物が発見されました。(P.20へ)



2号墳

直径8.8mの円墳で、石室からは、渡来人に関わる遺物が発見されました。(P.19へ)



首飾りの古墳人

首飾りをつけた古墳人が、体をよじるように倒れこんだ状態で発見されました。(P.12へ)



幼児

うつ伏せて、手足を大の字に広げた状態で発見されました。(P.13へ)



足跡

噴火から逃れるように、たくさん足跡が発見されました。(P.18へ)



2号甲・甲を着た古墳人

甲を着た古墳人と、丸められた状態の甲が発見されました。(P.11・14～16へ)



問 金井遺跡群を埋めた榛名山の火山活動はどんなものだったの？

答 1500年ほど前に大きな噴火が2度起こり、遺跡群周辺は壊滅的な被害を受けました。

担当 関 明愛



1 度目

6世紀初めにマグマ水蒸気爆発で始まった噴火で、泥雨状の火山灰が降った後、火山灰や火山ガスなどが混ざり合った「火砕流^{かさいりゅう}」が火口から一気に金井ムラに押し寄せました。火砕流が迫っていると感じたときにはもう逃げるのも困難で、息をのむ間に人や建物をなぎ倒し、飲み込んでいったことでしょう。

この噴火の被害によって金井周辺は人の住める場所ではなくなり、厚さ30～50cmほどの火山噴出物（火山灰・火砕流堆積物）で覆われたままでした。この中から「甲を着た古墳人」や「首飾りの古墳人」が発見されたため、このときに被災したことがわかったのです。

2 度目の軽石層

1 度目の火山灰・火砕流堆積物

2 度目

1度目の噴火から30～40年後の6世紀中ごろ、ようやく人が戻り、馬を飼い、復興の兆しが見えた頃に再び噴火が起きました。このとき噴出した軽石は、金井周辺に2mもの厚さで降り積もったのです。

そして、長い長い時を経て、私たちの前にその当時の姿を現すことになったのです。

火砕流とは、高温マグマの細かい破片が気体と混ざり合って流れ下る現象のことで、時速100km・温度1000℃を超える場合もあります。

金井遺跡群には時速108kmの速さで到達したと考えられています。



降り積もった榛名山の火山噴出物

←現在の
地表面

日本は太平洋をぐるりと囲む環太平洋造山帯にあるため、非常に多くの火山があります。榛名山もそのうちの一つです。

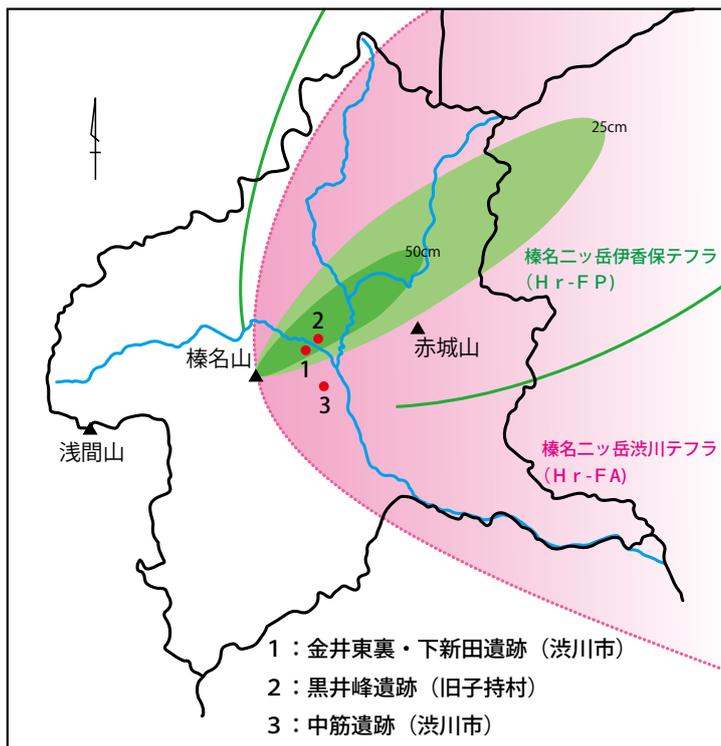
榛名山の火山活動は約 50 万年前に始まり、その後活動を続けていました。

その後、いったん活動を休止しましたが、再び約 5 万年前から活動を始め、大規模な噴火を繰り返しながら山の形を変えていく中で榛名山や榛名富士ができ、現在の姿になりました。



榛名山は、金井遺跡群を襲った 1500 年ほど前の噴火で二ツ岳を形成した後、現在まで大きな火山活動は見られていません。しかし、まだ活動を終えていない活火山なのです。

●火山噴出物はどこまで降ったのでしょうか。広がりを見てみましょう。



1 度目

6 世紀初めの噴火による火山灰は、桃色の範囲に積まりました。

2 度目

6 世紀中ごろの噴火による軽石は、緑色の範囲に積まりました。特に、緑色の濃い場所は 50 cm も積まりました。

問 なぜ、人やムラが当時のすがたで残っていたの？

答 榛名山の噴火で降り積もった火山噴出物にパックされていたからです。

担当 関 明愛



金井遺跡群が注目されたのは、本来ならば火山堆積物の中には残っていないはずのものが発見されたからです。

その発見とは、

- ①甲を着た状態の人（「甲を着た古墳人」）が発見されました。
- ②「甲を着た古墳人」から1mほど離れた場所では、別の甲（2号甲）と、鹿の角でできた小札（「鹿角製小札」）が発見されました。
- ③「首飾りの古墳人」は実際に首飾りをつけた状態で発見されました。

どれも日本では初めての発見で、貴重な遺物です。なぜ、金井遺跡群で発見されたのでしょうか。

それは、金井遺跡群が2度の噴火により厚さ2m以上の火山噴出物で埋もれていたからです。遺跡が埋もれて現在に至るまでに、地上では畑の耕作などが行われます。遺跡を埋める土の厚さが薄ければ、遺跡は壊されてしまいますが、金井遺跡群では極めて短い時間で2m以上もの火山噴出物にパックされたために貴重な遺跡が残ったのです。



「甲を着た古墳人」(右)と2号甲(左)の状態



発見された「首飾りの古墳人」

遺跡に学ぶ

また、火山噴出物の積もり方にも理由があります。金井遺跡群を覆った火山噴出物を詳細に見ると、細かい層と粗い層が交互に降り積もったことがわかりました。通常では、日本の土壌や火山灰の多くは酸性なので、「甲を着た古墳人」「鹿角製小札」などの鉄や骨・角は土の中で分解されてしまいます。さらに、土の中の水分によっても、分解が進み形がなくなってしまう。

土の中の水分のほとんどは雨水がしみこんだものですが、金井遺跡群の場合は火山噴出物が細かい層と粗い層が交互に降り積もったことで、水がしみ込

むことを防いでいたことから、貴重な遺物が多く残ったと考えられています。



粗い軽石層

粗い・細かい層が交互に堆積した火山噴出物

なぜ、火山噴出物は細かい地層と粗い地層が交互に降り積もると地中に水分がしみこむことを防ぐのでしょうか。

金井遺跡群では、現在の表土から地面にしみこんだ水はまず軽石層に達します。更に下の火山噴出物の地層は、粗い地層と細かい地層が交互に堆積しています。細かい地層は粒と粒の隙間が小さく、非常に強い毛管現象が発生するため、水を強く吸い取ります。その下の粗い地層は粒が大きい(=毛管現象が弱く、水を吸い取る力が弱い)ため、細かい地層から水を受け取ることができなくなります。細かい地層と粗い地層の間にまるで壁があるかのように見える現象は「キャピラリーバリア」と呼ばれています。金井遺跡群は分厚い火山噴出物によって物理的な破壊から守られたと同時に、何層ものキャピラリーバリアによって遺物が水から守られたことで、貴重な遺物が分解されず残ったと考えられます。

金井遺跡群には古墳や住居の跡、人や馬の足跡など、様々な貴重な情報が残されました。他の遺構や遺物についても、分厚く積もった火山噴出物によって守られました。発掘情報館では金井遺跡群の地層の実物が展示されています。実際に見てみましょう。



地層の実物(発掘情報館)

*毛管現象…液体中に細い管(毛細管)を立てると管内の液面が管外の液面より上がるかまたは下がる現象。管が細いほど上下が大きい。毛細管現象ともいう。

問 発見された古墳人について教えてください。

答 金井東裏遺跡では、火砕流に巻き込まれた4人の古墳人が発見されました。骨や歯の調査でわかった古墳人の特徴を紹介します。

担当 岩上千鶴



あご・鼻は細く頬が高いので、近畿および北九州古墳人にみられる渡来系の顔立ちと考えられます。

【甲を着た古墳人】



左腕の筋付着部の発達具合から筋力が優れていたことが判明しました。左利きなのでしょうか。

脚の筋付着部の発達具合から乗馬をしていた可能性があります。

復顔・復元像写真提供 / 群馬県立歴史博物館



「甲を着た古墳人」データ	
性別	男性
身長	164cm
年齢	40歳くらい
出身地	長野県伊那谷地域か？ (馬を飼育する文化を早い段階で導入していた地域)
特性	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダー的存在 ・鹿角製の飾り付きの鉄鍬<small>てつく</small>（鉄製のやじり）と鉾<small>ほこ</small>を所有 ・左腕で弓を引いたか ・マツリを行う立場か ・西の地域から移住か

【出土状況】

- ・溝の中から甲を着た状態で発見されました。
- ・膝立ちの状態で上半身が前に倒れ込んでいました。
- ・顔の下には胃も埋もれていました (P.15)。
- ・腰には提碂さげとと刀子とうずを提げていました (P.19)。

【首飾りの古墳人】

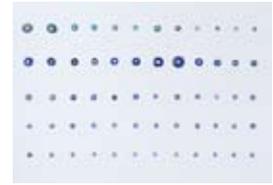
あごが角ばり鼻は広めなので関東から東北の古墳人にみられる顔立ちと考えられます。



復顔写真提供 / 群馬県立歴史博物館



首飾り (石製管玉とガラス製小玉)



「首飾りの古墳人」データ	
性別	女性
身長	143.8cm
年齢	30歳くらい
出身地	「甲を着た古墳人」と同じ地域で生まれたか？
特性	<ul style="list-style-type: none"> 骨盤の痕跡から出産の経験あり ほどよい筋肉の持ち主で農作業などの肉体労働に関わっていた可能性あり 西の地域から移住か

【出土状況】

- ・「甲を着た古墳人」と同じ溝の中から首飾りをつけた状態で発見されました。
- ・顔を右手でかばい、体をよじるように倒れ込んでいました。
- ・左腰の近くから、石製の白玉がたくさん発見されました。袋に入れて提げていたのかもしれませんが。(この白玉はマツリのためのものなののでしょうか。)



復顔とは、頭蓋骨をもとに生前の顔を復元する技術で法医学等で使われます。

右：「首飾りの古墳人」の頭蓋骨
左：「甲を着た古墳人」の頭蓋骨

形質的観察や最新技術でわかったこと

- ・大腿骨の長さを調べれば、身長や性別を推定できます。
- ・脚や腕の骨の発達具合を調べれば、筋肉量の推定ができます。
- ・筋肉量の推定ができれば、どのような生活をしていたのかを推測できます。
- ・頭蓋骨からは顔を復元することができます。
- ・歯を調べれば、生まれた地域が推定できます。

骨がしっかり残っていたことに加え、最新技術の総合力でわかったことがたくさんあったのです。



【幼児の古墳人】

「幼児の古墳人」データ	
性別	不明
身長	100cmくらい
年齢	5歳くらい
出身地	金井の地域周辺
特性	<ul style="list-style-type: none"> ・生え変わる直前の永久歯が残っていた ・骨は頭蓋骨と右脚の一部の骨のみが残っていた ・大の字に広げられた体の痕跡が残っていたため身長を推定できた



【乳児の古墳人】

「乳児の古墳人」データ	
性別	不明
身長	不明
年齢	0歳くらい（とても骨が薄いため）
出身地	不明（歯が残っていなかったため）
特性	<ul style="list-style-type: none"> ・「甲を着た古墳人」のすぐ近くで頭骨の一部が発見された

生育地（出身地）がなぜわかるの？
ストロンチウム同位体比分析とは・・・

ストロンチウムは岩石に微量に含まれている元素で、その同位体比は固有の値を示します。ストロンチウムは、水やその水を飲む動植物を通して人体に取り込まれ、特に歯に蓄積されます。そのため、歯根のストロンチウム同位体比を調べると、歯根が成形される幼少期を過ごした場所を推定することができるのです。

4人の関係は？
DNA分析の結果とは・・・

近い場所で被災した4人の古墳人。「甲を着た古墳人」と「首飾りの古墳人」は、骨が比較的よく残っていたため、歯のDNA分析をすることができました。分析の結果、2人の間に血縁関係はないことがわかりました。幼児・乳児2人との関係はわかっていません。

問 「甲を着た古墳人」の発見って、何がすごいことなの？

答 “甲を着た状態”であったことです。

担当 梅村唯斗



これまでの発掘調査で、火山灰の中から古墳時代の人が発見された例はありません。まして甲を着た状態で発見されるなんて全国で初めてのことです。これまで、この時代の甲は副葬品として“着ていない状態”で古墳の中から発見されることがほとんどでした。甲の表現がある「武人埴輪」などで装着した姿を推定していましたが、実際に人が着た状態がわかったことは貴重な発見です。

さらに、近くに発見されたもう一つの甲（「2号甲」）の中からは、鹿角製小札が出土しました。

鹿角製小札の類例は朝鮮半島にあるのみで、国内では初めての発見です。



発見時の「甲を着た古墳人」



「2号甲」の中から出土した鹿角製小札



「甲を着た古墳人」(手前)と「2号甲」(奥)

問 どんな甲を着ていたの？

答 短冊状の鉄板をつなぎあわせた
“小札甲”^{こざねよろい} という甲を着ていました。

担当 梅村唯斗



発見された時には鉄サビが甲を覆っていたため、どんなつくりかわかりませんでした。

そこで、X線CTスキャンを行ったところ、短冊状の鉄板をつなぎあわせた“小札甲”という甲であったことがわかりました。その後、鉄サビを丁寧に取り除いていくと“小札甲”のより詳しいつくりを確認できました。

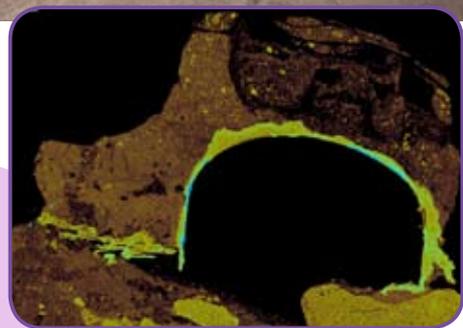
また、頭部のX線CTスキャンによる調査で「甲を着た古墳人」の顔の下に鉄製の冑^{かぶと}があることまでわかりました。



発見時の状態

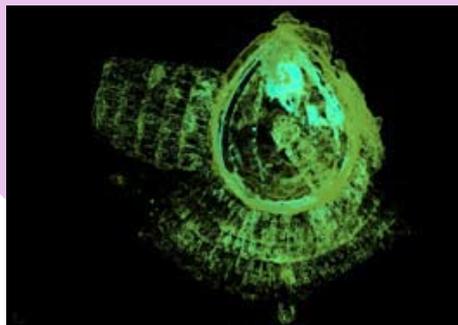


冑出土状態



←うつぶせの頭骨

←冑



CTスキャンによって見えた冑の姿
(冑を上から見た画像)



冑の復元図（左側面）

問 小札甲とはどんなものなの？

答 薄くて小さな鉄板をつなぎ合わせてつくられた最新の甲で、多くは大型の前方後円墳から発見されています。

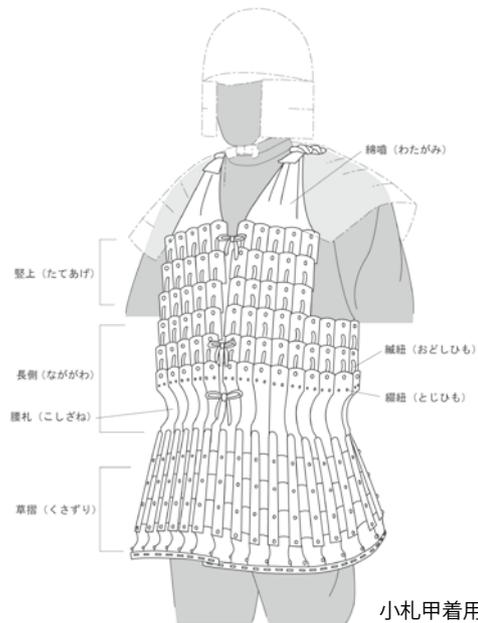
担当 梅村唯斗



小札甲は、5世紀後半からつくられた甲で、この時代、最新のものでした。

通常、小札甲は500～800枚の小札からできていますが、なんと「甲を着た古墳人」が着ていた甲は1800枚もの小札でつくられていました。通常の数以上の数の小札でつくられた、最新の甲を着ていたことから、この人物は有力な豪族であった可能性が高いと考えられます。

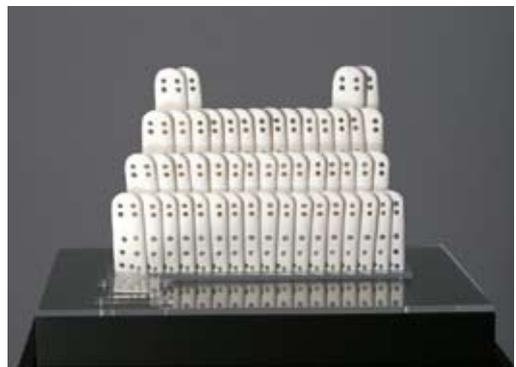
また、2号甲から発見された鹿角製小札は、その形状や性質から、胸当てあるいは脇当てとして攻撃を防ぐ実用性よりも、見た目を重視した装飾的意味合いが強かったものと考えられます。



小札甲着用の復元図



巻かれた状態で発見された鹿角製小札



鹿角製小札復元模型

×線 CT スキャンとは、物体に対して360度レントゲン撮影をおこない、内部がどうなっているかを調べる技術です。医療や工業で使われていますが、遺物内部の状態を壊さずに見られることから“文化財の身体検査”とも呼ばれています。

古墳人は、どのような生活をしていたの？

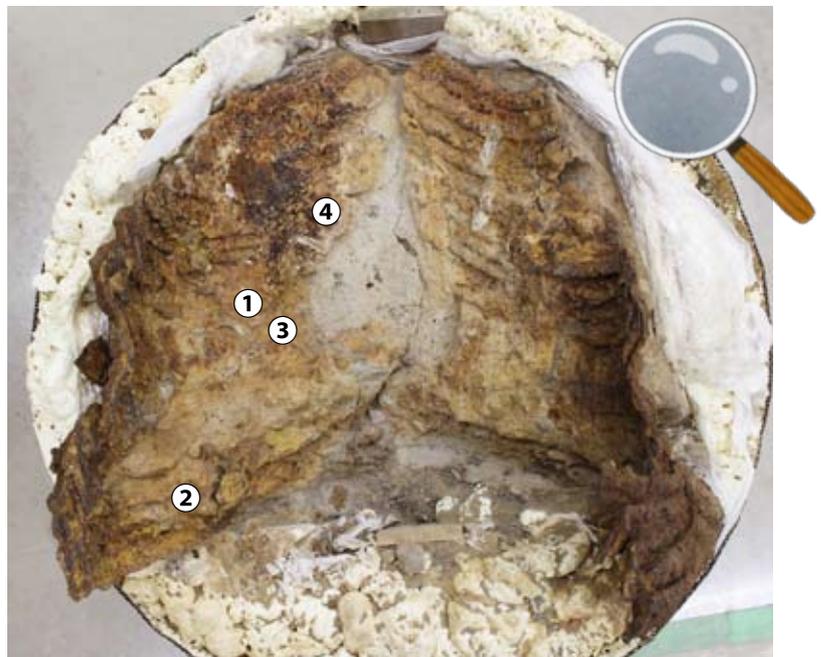
皆さんが考える、生きるために必要なものといえはなんでしょうか。これを考えるとき「衣・食・住」の3要素が思い浮かぶ人も多いはずです。ここでは、金井遺跡群に生きた古墳人たちがどのような生活をしていたのかを、3要素ごとにみていきましょう。 担当 山本直哉

金井遺跡群から学ぶ 授業に使える “なぜ？”

衣

古墳人たちはどのような服を着ていたのでしょうか。出土例がなく、これまでは、人物埴輪などから服装を考えていました。

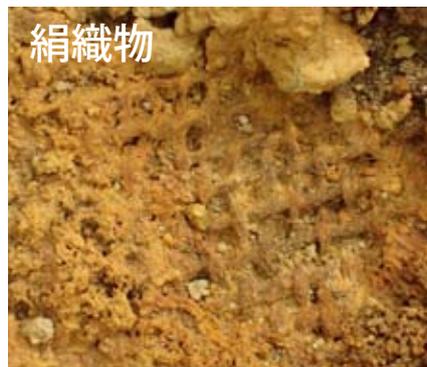
しかし、「甲を着た古墳人」の甲の内・外側からは繊維質が錆と一緒に見つかりました。甲の内側に服を着ていたと考えられます。さらに、その繊維質を観察することで、素材や織り方までわかりました。



甲前胴内部 (①～④)に繊維質付着



麻織物



絹織物

左：繊維質拡大 (②の位置に付着)
右：繊維質拡大 (④の位置に付着)

どちらも「平織」と呼ばれる、手ぬぐいにも使われている丈夫な織り方です。この他に、組紐なども残っていました。

金井遺跡群では、榛名山から逃げるように、火山灰を踏みしめて歩いた大人や子どもの足跡が分かりました。ほとんどの足跡は裸足のものでしたが、なかには履物の跡も見つかっており、当時の人々が何かしらの履物を履いていたと考えられます。



履物の跡か？



くっきり残る足跡

食

金井遺跡群の古墳人は何を食べていたのでしょうか。金井東裏遺跡からは畑が見つかっており、畑の土を分析したところ、陸稲やムギが栽培されていた可能性がでてきました。同じ榛名山の東麓にある有馬条里遺跡（渋川市）では、6世紀初めの噴火によって埋もれた畑やその後に作られた水田が見つかっており、古墳人たちはムギや水稲栽培したコメなども食べていた可能性があります。

また、竪穴住居にはカマドがあり、そこでは土器で食べ物を煮炊きしていたと考えられます。花粉分析などから当時栽培していた作物や周辺の植生が分かってくると、古墳人たちの食生活が少しずつ解明できるかもしれません。



金井東裏遺跡空撮



古墳時代の畑跡

住

金井遺跡群では、竪穴住居が複数見つかっています。金井下新田遺跡では、一辺が約9mの方形で6本の柱をもった竪穴住居も見つかりました。住居にはカマドも設けられており、当時の人々が暮らす様子を感じることができます。また、この建物では炭化した状態の柱が5本見つかっており、そのうちの1本は「ほぞ」と考えられる突起がありました。現在の木造建物にも使われている工法で建てられていたことがわかる、貴重な発見となりました。



中央の突起が「ほぞ」

金井遺跡群の「衣・食・住」についてみてきましたが、古墳人の生活は私たちの今の生活と無関係ではありません。古墳時代の人々の生き方を知ることで「なぜ」と感じるものもあったと思います。そうした疑問を解明し、より深く勉強していくことで、過去の人々を生活がより身近に感じられるはずです。

渡来人との関わりがわかるものってあるの？

金井遺跡群でも、渡来人との関わりを示す遺物
 がいくつか出土しました。実際に、金井遺跡群か
 ら出土した遺物と大陸で出土した遺物の比較か
 ら、大陸と日本の繋がり、とりわけ交流が活発だっ
 た朝鮮半島との関係を見ていきましょう。

担当 山本直哉

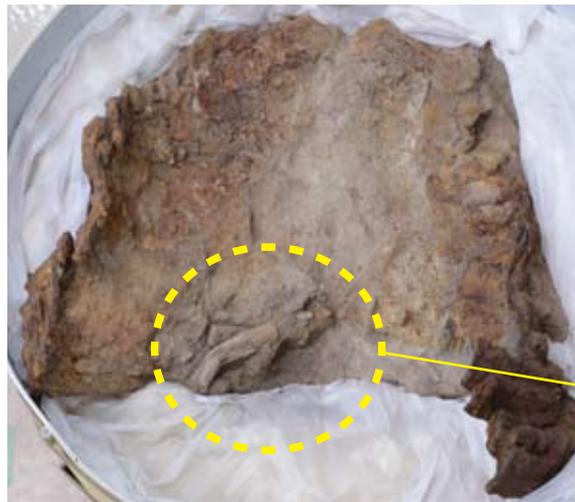
さげと どうす
提砥と刀子

提砥とは、一端に孔
 をあけて紐などを通
 し、腰に下げた砥石で
 す。また刀子とは、鉄製の小刀です。当時は、実用
 品として使用されるだけでなく、威信材の一つとし
 て捉えられていました。提砥は朝鮮半島では多数発
 見されており、特に新羅のものが有名ですが、伽耶・
 百済での発見例もあります。4～5世紀頃の朝鮮
 半島では、王や貴族たちが金銀の飾りと一緒に提砥

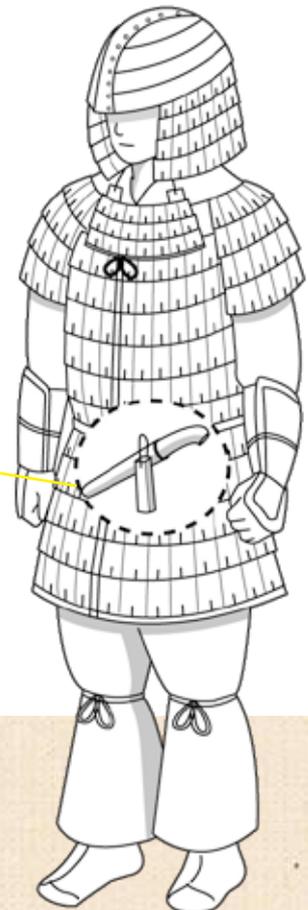
と刀子を腰からさげる文化がありました。金井東裏
 遺跡では、「甲を着た古墳人」の甲内側から提砥と
 刀子が合わせて見つかり、提砥は2号墳他全部で
 5点見つかりました。「甲を着た古墳人」は朝鮮半
 島の文化に影響を受けたのでしょうか。このような
 持ち物から、日本と朝鮮半島を繋ぐ渡来人の存在を
 感じ取ることができます。



2号墳より発見された提砥



「甲を着た古墳人」の甲の内側で発見された提砥と刀子



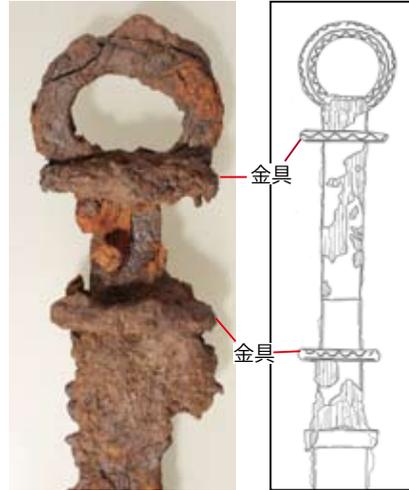
そかんとうたち 素環頭大刀

柄の先に環状の装飾を持つ大刀を素環頭大刀といいます。

金井東裏遺跡1号墳より発見された、柄の部分に金具を付けたタイプは国内ではほとんどみつかりません。一方、朝鮮半島では多くの発見例があり、



『群馬の遺跡4』より転載



1号墳より発見された素環頭大刀の柄の部分

百濟で発見された素環頭大刀の柄

『埋文群馬No.64』より転載

ほこ 鉾

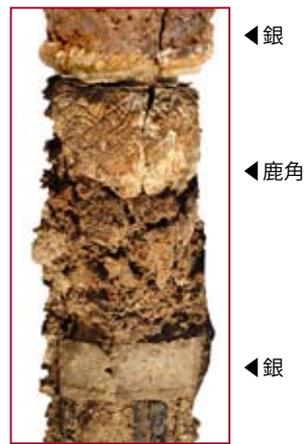
鉾とは、剣に長い柄の付いた刺突のための武器です。古墳人から7m離れたところから発見されました。

直弧文が刻まれた鹿角製の装飾と、銀の装飾が付けられたものです。銀の装飾がついた鉾は、朝鮮半島で多数発見されています。

直弧文は、直線と弧線を組み合わせた、古墳時代特有の呪術的な文様。「甲を着た古墳人」の鉾は、日本特有の模様を持つ、朝鮮半島系の鉾ということになります。



鉾発見状況



鹿角製・銀装飾部分拡大



出典：上毛新聞社出版『古墳人、現る』

渡来人によって日本に伝えられたものが金井遺跡群から発見されています。身近な場所で発見された遺物をもとに、渡来人の存在を感じてみてはいかがでしょうか。

3 編集後記 ～実は身近な発掘調査、私たちは遺跡の上に住んでいる～

今立っている地面の下を想像してみてください。土の中にはアリの巣があって、ミミズやモグラがいて…。それだけではありません、むかしの人々が生活していた痕跡が眠っているのです。私たちは遺跡の上に暮らしています。なんだか急に、地面の下に何があるか気になりませんか？

発掘調査は、むかしの人々が地面に残した生活の痕跡を探し、当時の暮らしを明らかにするために痕跡を掘り、掘った情報を図面や写真に記録し、後世に残す仕事です。

金井遺跡群も道路建設工事で地面の下に眠っている痕跡が壊れてしまう前に、記録をとるための発掘調査をおこないました。

身近な土地に眠っていた遺跡が気になるあなた！
発掘情報館まで遊びにいらして下さい。



門から発掘情報館を見る



発掘調査前の金井の風景



発掘調査のようす



現地説明会のようす



発掘調査後の高架下のようす

INFORMATION

＊発掘情報館

◇体験学習 / 日曜日～木曜日 午前9時～午後5時(受付は午後3時まで)

◇図書室 / 一般利用は日曜日・月曜日・金曜日(午後12時から1時は閉室)

＊最新情報展 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)

土曜日・祝日は休館

■第2期『天明泥流に被災した村』

◇展示期間：令和元年11月10日(日)～4月12日(日)

◇ギャラリートーク

日時：令和2年3月1日(日) 午後1時～午後3時

場所：発掘情報館 2階研修室、資料展示室

費用：無料

参加：100名(事前申し込み不要)

＊写真で見るハッ場ダム 26年の発掘調査

午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)

土曜日・祝日は休館

◇展示期間：令和元年10月5日(土)～3月8日(日)

場所：発掘情報館 3階遺跡情報室

＊メールによる行事案内のお知らせ

当事業団では、年間を通じて展示会や講演会など様々な行事を開催しています。メールによるこれらの案内をご希望の方は、下記のアドレスよりお申し込みください。

なお、受付の事務処理上、件名は『行事案内希望』として、本文に『住所・氏名・電話番号』を記入しご連絡下さい。

◇メールアドレス：gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp

◇QRコード

※携帯電話のメールアドレスへ連絡をご希望の方はパソコンからの着信ができるように設定して下さい。



『遺跡に学ぶ 金井遺跡群から学ぶ 授業に使える“なぜ？”』

第43号 令和元年11月8日発行

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

☎0279-52-2513(普及課直通)

■本誌は学校および教育関係者向けの埋蔵文化財情報誌です。学校の授業等で誌面内の文章・写真・図面をコピー・利用する場面は著作権フリーです。それ以外でのコピー・利用を禁じます。

■ご意見ご質問は上記宛てに連絡をお願いします。